

横浜市 歴史博物館 NEWS 34 2013・3

- ◇ いんたびゅー 大口勇次郎
女性の力に支えられた社会が古文書の中から浮かび上がる
- ◇ エジンバラ訪問記
特別展「N.G. マンローと日本考古学」によせて
- ◇ 研究余話 館収蔵「書画帖」覚え書き
- ◇ 〈収集・収蔵資料の紹介〉 北条家朱印状
- ◇ のぞきからくり「八百屋お七」展示報告
- ◇ 「武家の古都・鎌倉」の世界遺産登録にむけた活動
- ◇ 〈ちよいとミュージアムショップたいむ〉 [レックル]と[踊るはにわ]のコラボ新登場!
- ◇ 〈知ってますか?〉「横浜歴博もりあげ隊」



女性の力に

支えられた社会が

古文書の中から

浮かび上がる

◎近世史に興味を持った理由は何ですか。

もともと高校のころから歴史が好きでした。大学では初め、明治維新前後の近代史を研究するつもりでしたが、当時、先輩などが行っていた江戸時代の農村のフィールド調査についていき、何か面白そうだと引き込まれてしまいました。調べたのは庄屋だった家に残る古文書で、主に年貢や裁判に関する記録です。こういう史料をもとに、何かを作り上げるところに、近世史の魅力を感じました。卒論は年貢関係の史料をもとに書きました。史料から、江戸時代中期から後期にかけて、長野県の山の方の村で、年貢米をお金に換えて江戸に運ぶシステムがあることが分かり、さらに米の換金法、価格の決め方についても考察しました。それまで年貢の換金は、貨幣経済の発達した関西地方の事例ばかり挙げられていたもので、そうではない地方でも行われていたのが興味深かったのです。

お茶の水女子大学名誉教授

大口勇次郎

(おおくち・ゆうじろう)



江戸との関係が深い

◎当館の開館一八周年記念特別講演会で、現在の鶴見区生麦の名主の家で記された「関口日記」について講演されましたが、横浜の史料との関わりは。

三〇年ほど前、開館間もない横浜開港資料館の調査研究員だった阿部征寛さんから、同館の論文集中「関口日記」をもとに書いてほしい、と日記を活字化した本を渡されたのが始まりです。「江戸近郊の村」というテーマで書くつもりで、読んでいくと、名主の父親は江戸の代官所に行き来し、息子は江戸の漢学塾に留学、娘は江戸に嫁ぎ、離縁した後、江戸城の大奥に入入りして、この家の人は、江戸との関係が意外と深いことが分かりました。講演会でも話した娘の千恵に的を絞って書いたところ、途中で原稿の規定枚数に達してしまい、三本目の論文でようやく千恵の死まで

書くことができました。次に彼女の弟が漢学塾に行ったことについて書きました。論文はそこまでですが、研究は続けています。

村で文化的な貢献も

◎「関口日記」を通じて、生麦村の女性についてどのようなことが分かりますか。

この日記は一八世紀半ばから約一四〇年間という長期にわたっているのが大きな特色ですが、女性がとくに出てくるわけではありません。千恵は数え年一二歳で江戸に行き、三〇年もたつてから実家に戻ってきたので、その後は村の中では浮いたような存在だったと思われます。千恵の甥は日記で「御殿伯母」と呼んでいるので、御殿暮らしが長かったせいで、気位が高かったと察せられます。ただ、千恵の死後、初七日の法事に呼ばれた人の中に、近くの寺子屋の師匠がいます。同じころ亡くなった他の家族の葬式には来ていないので、家の付き合いではなく千恵の知り合いで、千恵が寺子屋の手伝いをしていて、と考えることができます。そういう形で、村にもある程度、文化的な貢献をしていたのかもしれない。

地域とつながるため

◎千恵をはじめ、近世の女性についての研究ではどのような視点で取り組んでいますか。

女性に焦点を当てる女性史ではなく、その時代の社会を女性の目で見ると、あるいは女性の出てくる史料で見る、ということにこだわっています。近世の古文書の場合、行政や年貢の史料には女性が出てこないの

ですが、今の戸籍に近い宗門人別帳には出てきます。その研究の中で、当時、戸籍の筆頭人は男性が原則で、女性は一時的とされる中、女性が長期間、当主をしていた例が、今の東京都大田区辺りの村で見つかりました。他の史料と合わせると、若い男がだらしのないので母親の力が必要になり、その当主を村も許していた、と考えられるのです。女性に焦点を当てれば「女性が頑張っていた」という見方になりますが、歴史全体では「男性が女性の力を借りない」とやっていたいなかった」という別の見方ができると思います。

◎当館にはどんなことを期待しますか。

博物館は地域とどうつながるか、ということも大切です。ここは開港資料館との関係で近代以前の時代を扱っていますが、地域との関係を深めるために、現代をどう扱うかも検討すべきでしょう。また館長以下、ここで働く人の顔をもっと表に出してもいいのでは。「この展覧会を企画したのは、この学芸員です」などと紹介すれば、来館者は親しみをもつものです。人を通じて市民とつながりを深めるのも大切だと思います。

▽おおくち・ゆうじろう プロフィール

●一九三五年、東京都生まれ。東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。専門は日本近世史。お茶の水女子大学・聖徳大学教授を歴任、二〇〇一年よりお茶の水女子大学名誉教授。地方史料にもついた村落構造や女性についての研究から、天保期の財政研究や勝海舟全集編纂にいたるまで、多彩な研究成果を発表し続けている。

●主著『女性のいる近世』（勁草書房）、『徳川時代の社会史』（吉川弘文館）、『幕末農村構造の展開』（名著刊行会）、『御殿伯母』関口千恵の生と死（『日記が語る19世紀の横浜』（山川出版社）、共編『勝海舟全集 全三巻』（勁草書房）ほか

エジンバラ訪問記

特別展「N・G・マンローと日本考古学―横浜を掘った英国人学者」によせて

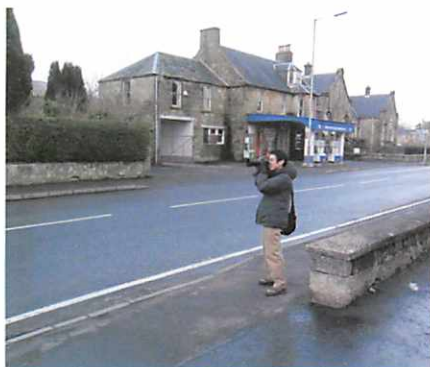
ヒースロー空港なう！ カメラマンの吉川さんと一週間エジンバラに滞在し、四月の特別展「N・G・マンローと日本考古学―横浜を掘った英国人学者」の準備をしていました。

いきなり「N・G・マンロー」と言ってもご存じない方が多いのではないかと思います。ニール・ゴードン・マンロー (N・G・Gordon Munro 一八六三―一九四二) はスコットランド出身の医者で、一八九一年に

来日してから横浜で三〇年以上暮らして



キンロスの北東3.5kmにあるオーウェルOrwellの立石を眺める高橋。マンローは北海道小樽市忍路のストーンサークルを調査したことで知られている。



マンローが幼少期を過ごしたキンロスKinrossの街並みを撮影する吉川カメラマン。



マンロー肖像写真

いました。サブタイトルでは「英国人学者」としてありますが、一九〇五年には日本に帰化しています。マンローは医者でしたが、同時に考古学者、人類学者としても活躍しました。一九〇八年に刊行された著書「Prehistoric Japan」などに示された彼の研究は当時の最先端の水準にあり、日本考古学に大きな貢献をしたといえます。

マンローは母国スコットランドの王立博物館に多くの資料を送っていました。このマンロー資料のうち、これまでわが国で紹

介されていなかった横浜市内の遺跡からの出土資料の撮影を行なうこと、これが今回の訪問の第一の目的でした。

マンロー資料を所蔵するスコットランド国立博物館 (National Museum of Scotland) は、エジンバラ市旧市街の中心部にあります。エジンバラは世界遺産にもなっている美しい街で、特に夏の観光シーズンには多くの観光客で賑わいます。一昨年夏にリニューアルオープンしたばかりの国立博物館は、自然史から世界の文化、スコットランドの歴史までをカバーする総合博物館であり、リニューアルから一年経たずに入場者は百万人 (一) を超えたということです。マンローによる発掘資料は、かつては常設展示の一角を占めていましたが、リニューアル後はアイヌ資料のみが展示されています。

常設展に展示されていない所蔵資料は、エジンバラ郊外のコレクションセンターに保管されています。このセンターはリニューアルに伴って新設されたもので、一四〇万点もの資料が収蔵されています (もともと、うち一二〇万点は昆虫標本だそうですが・・・)。この移動作業だけで三年間かかったということです。データベースによればマンロー資料は全体で

二五〇〇点以上あり、考古資料のほかにアイヌの民族資料など多岐にわたっています。学芸員のロジャー・バックランドさんの協力のもと、三ツ沢貝塚出土資料を中心に、一〇〇カット以上の撮影を行うことができました。

今回の訪問の第二の目的は、マンローの足跡をたどることでした。エジンバラ大学ではマンローの成績表や博士論文、スコットランド国立図書館では英国の医師の名簿 (マンローの父・ロバートも医者でした) や一九世紀の地図を調べて、来日以前のマンローの足取りをより正確に把握しようと試みました。またレンタカーを借りてマンローの生まれたダンディー市、育ったキンロス町、さらに大学生の頃に一時暮らしたエジンバラ郊外のラソー村などを訪ねました。地震のない国だからといえばそれまでですが、予想していた以上にマンローが暮らした頃の建物や街並みが残されていて驚きました。

横浜市歴史博物館の平成二五年度特別展「N・G・マンローと日本考古学」は、マンローの生誕一五〇年を記念して開催されます。今回撮影してきたスコットランド国立博物館所蔵資料のパネル展示に加え、国内に残されたマンロー発掘資料が一堂に会します。この展示を通じて、英国で生まれ日本で暮らした考古学者・マンローの生涯を少しでも知っていただければ幸いです。

なお、今回の英国調査にあたりましては、大和日英基金の奨励助成を受けました。

(高橋健)

館収蔵「書画帖」覚え書き

はじめに

博物館では、横浜やその歴史に関わる資料の収集を、年間を通じて行っています。博物館には、資料をもとに展示や調査研究をしたり、資料を保存して未来へ伝えたりする役割があります。そのため、資料収集は博物館の重要な仕事のひとつといえます。資料収集には、購入や、一般の方々からの寄贈（寄付・寄託）（博物館で預かりし、保管する）などの方法があります。今回の研究余話では、平成一三年度に「寄贈いただいた書画帖について」を紹介します。

書画帖の概要

書画帖は、書や絵画作品を折本などに仕立てたものです。一人の作家の作品からなるものもあれば、複数の作家の作品からなるものもあります。書画帖は江戸時代から作られるようになったといえ、個人の年寿や送別、追善や、詩歌・書画・音楽などの会に際して作成されることが多いようです。

このたび収蔵資料の仲間入りをした書画帖は、横浜市内の森家より「寄贈いただきしました。先代のご当主が戦後間もなく入手されたもの」ということですが、それ以前

の伝来はわかっていません。縦二六・五×横一九・五センチメートルの折本で、表紙に題箋などはみられず、表題は不明です。六六名の作者による六八点の書画が貼り込まれています。書画はすべて絹本（絹地に描かれている）で、見開き右が書、左が画となるよう、交互に配置されています。ただし最後の見開きでは右が画、左、すなわち書画帖を締めくくる作品が画と画賛（画とともに書かれた文や詩歌。この作品では和歌）になっています。この締めくくりの作品は、長州藩出身の歌人で国学者、明治政府では宮内省に出仕した近藤芳樹によるものです。

この書画帖には、関連する資料が三点付属しています。一点目は書画帖の芳名帳です。縦書の青い罫線の入った和紙の用箋が綴じられた縦帳で、作者全員の名前と、役職や号などが掲載順に記載されています。表紙には「寶帖筆者芳名」と記されていますが、この「寶帖」が書画帖成立時から書画帖が同時に成立したかどうか、作者は同じかどうかといったことも現時点ではわかっていません。残り二点は、書画帖掲載の漢詩や和歌の読み下しと解釈を半紙に記

したものです。森氏によれば、これは先代のご当主が誰かに依頼し、作成してもらったものではないかということでした。

書画帖の作者と成立年代

それでは、書画帖の内容の一部を見ていきましょう。左下の写真は書画帖の一部分を開いたものです。先述の通り、右が書、左が画になっていることがわかります。書は「花」と題された和歌で、「むかしたれ（誰）さくらを花といひそめて（言い初めて）花をさくらの名とはなし（為し）けむ（括弧内筆者）」と、「花」といえば「桜」を表すようになっ

たこととその時代への思いを詠んでいます。作者は千家尊福で、出雲国造家に生まれ、明治政府の太政官につとめながら出雲大社の大宮司を兼務し、のちに元老院議員、貴族院議員などを歴任、第一次西園寺公望内閣では司法大臣をつとめた人物です。画は、福祿寿と思われる老人が蝶を眺める作品で、作者は柴田是真です。柴田は絵師、漆工で、明治六年（一八七三）にウィーン万国博覧会に出品、受賞し、明治二十三年（一八九〇）には皇

室の美術、工芸品を制作する帝室技芸員にもなりました。画中には「八十翁是真」と記されています。柴田の生年は文化四年（一八〇七）、八〇才（数え年）になるのは明治十九年（一八八六）ですので、その頃に描かれた作品と思われます。

書画帖には他にも多くの作品が貼り込



【表】書画帖の作者（掲載順）

作者名(芳名帳による)	芳名帳記載情報	生年	没年	掲載作品	作品中年代	備考
1 有栖川宮熾仁親王	元帥陸軍大將、禮堂	天保6年(1835)	明治28年(1895)	漢文	明治14年(1881)	
2 森寛寛	帝室技芸員	文化11年(1814)	明治27年(1894)	画		画家
3 近衛忠照	公卿元御(五?)摂家	文化5年(1808)	明治31年(1898)	和歌		
4 田能村直入	帝室技芸員、画家	文化11年(1814)	明治40年(1907)	画・画賛	明治15年(1882)	
5 千家尊福	出雲大社宮司、歌人	弘化2年(1845)	大正7年(1918)	和歌		出雲国道家
6 柴田是真	帝室技芸員、画家	文化4年(1807)	明治24年(1891)	画	明治19年(1886)頃	漆工、絵師
7 太田資之	儒者	不明	不明	和歌		人物不詳
8 姫島竹外	画家	天保11年(1840)	昭和3年(1928)	画・画賛	明治12年(1879)	元福岡藩士
9 高崎正風	男爵秘密顧問官、御歌所長	天保7年(1836)	明治45年(1912)	和歌		元薩摩藩士
10 渡辺小華	渡辺華山二子、画家	天保6年(1835)	明治20年(1887)	画	明治13年(1880)	元田原藩家老
11 山田空斎	伯爵陸軍中尉、司法大臣	弘化元年(1844)	明治25年(1892)	漢詩	明治12年(1879)	元長州藩士
12 大庭学儒	画家	文政3年(1820)	明治32年(1899)	画		小弥太、元長州藩士
13 鳥尾得庵	子爵秘密顧問官	弘化4年(1847)	明治38年(1905)	漢詩		
14 帆足杏雨	画家	文化7年(1810)	明治17年(1884)	画・画賛	明治14年(1881)	元幕臣
15 山岡鉄舟	子爵	天保7年(1836)	明治21年(1888)	漢詩		画家
16 滝和孝	帝室技芸員	天保3年(1832)	明治34年(1901)	画		元幕臣
17 勝海舟	伯爵秘密顧問官	文政6年(1823)	明治32年(1899)	漢文		画家
18 奥原晴湖	女子、画家	天保8年(1837)	大正2年(1913)	画・画賛		元古河藩家老娘
19 蘇谷一六	宮内省御用掛、書家	天保5年(1834)	明治38年(1905)	漢詩		元水口藩侍医の子
20 西島青浦	木戸公秘書、画家	文政11年(1828)	明治45年(1912)	漢詩		
21 大鳥圭介	子爵秘密顧問官、如風	天保4年(1833)	明治44年(1911)	漢詩		元幕臣
22 福島柳園	画家	文政3年(1820)	明治22年(1889)	画・画賛		
23 穴戸瑛	子爵元老院議員、潮坪	文政12年(1829)	明治34年(1901)	漢詩		元長州藩士
24 天野方壺	画家	文政11年(1828)	明治27年(1894)	画・画賛		
25 馬島杏雨	国手、学者	不明	大正9年(1890)	漢文		元会津藩士
26 梅坡	画人	不明	不明	画		人物不詳
27 大沼枕山	国手、詩人	文政元年(1818)	明治24年(1891)	漢詩		人物不詳
28 花竹	画人	不明	不明	画・画賛		元岩国藩士
29 玉乃世履	大審院長、学者	文政8年(1825)	明治19年(1886)	漢詩		人物不詳
30 梅幸	不明	不明	不明	漢詩		元薩摩藩士
31 中井桜洲	滋賀県知事、詩人	天保9年(1838)	明治27年(1894)	漢詩		元富山藩士
32 藤田吳江	東京府御用掛、画家	文政11年(1828)	明治18年(1885)	画・画賛	明治18年(1885)	元仙台藩士娘
33 西尾為忠	勤王志士、儒者	文政13年(1842)	明治33年(1900)	漢詩		
34 武村耕雲	女子、画家	嘉永5年(1852)	大正4年(1915)	画	明治12年(1879)	
35 小野湖山	書家	文化11年(1814)	明治43年(1910)	漢詩		
36 小西哲雲	書家	文政11年(1828)	不明	画・画賛		
37 市河万庵	書家	天保9年(1838)	明治40年(1907)	漢文		
38 安田大斎	横濱客漁、画人	嘉永元年(1848)	明治21年(1888)	画・画賛		元長州藩士
39 岡三橋	太政官書記官、詩人	天保3年(1832)	明治27年(1894)	漢詩		人物不詳
40 守山春農	画家	不明	不明	画・画賛	明治14年(1881)	元彦根藩士
41 谷録臣	大蔵大丞、如意山人、詩人	文政5年(1822)	明治38年(1905)	漢詩		長崎の豪商・篆刻家
42 中西耕石	耕翁、画家	文化4年(1807)	明治17年(1884)	漢文		巨勢小石か
43 小曾根乾堂	儒者	文政11年(1828)	明治18年(1885)	漢文	明治17年(1884)	元長州藩士
44 巨勢深江	画家	不明	不明	漢詩		
45 伊勢小松	宮内省京都支廳員	文政5年(1822)	明治19年(1886)	漢詩		
46 安田老山	画家	天保元年(1830)	明治16年(1883)	画		
47 山中信天翁	侍講大辨	文政5年(1822)	明治18年(1885)	漢詩		書家
48 藤堂凌雲	伊勢藩家々扶、画人	文化6年(1809)	明治19年(1886)	漢詩	明治19年(1886)	
49 島地黙雷	宗門管長、仏学者	天保9年(1838)	明治44年(1911)	漢詩		僧侶(浄土真宗本願寺派)
50 菅原白龍	画家	天保4年(1833)	明治31年(1898)	画		
51 菊支峰	山陽外史三子、儒者	文政6年(1823)	明治22年(1889)	漢詩		
52 守山湘驥	致翁、書人	不明(天保頃)	不明	画	明治14年(1881)	
53 岡田馨蔵	画家	明治15年(1882)	明治15年(1882)	漢詩		
54 服部波山	画家	文政10年(1827)	明治27年(1894)	画・画賛		
55 柳田正章	書家	寛政9年(1797)	明治21年(1888)	漢文		
56 鈴木香峰	画人	文化5年(1808)	明治18年(1885)	漢詩		吉原宿脇本陣、同宿問屋
57 岡南香	内閣書記官、詩人	天保3年(1832)	明治27年(1894)	漢詩		岡三橋、前出(39)
58 山崎重澄	画家	不明	不明	画・画賛		人物不詳
59 帆足杏雨	画家	文化7年(1810)	明治17年(1884)	漢詩		前出(14)
60 林素山	画家	不明	不明	画	明治12年(1879)	人物不詳
61 香雅	歌人	不明	不明	和歌		人物不詳
62 長古雪	長三洲舍弟、書家	不明	不明	画・画賛		
63 深野知堂	判事、詩人	文久3年(1863)	昭和初期	漢詩		
64 吉沢雪庵	画家	文化6年(1809)	明治22年(1889)	漢詩		
65 日下部鳴鶴	太政官大書記官、書家	天保9年(1838)	大正11年(1922)	漢詩		元彦根藩士
66 江馬天江	文部省役員、画家	文政8年(1825)	明治34年(1901)	画・画賛		
67 岩井翠雲	女子、画家	不明	不明	画		人物不詳
68 近藤芳樹	御歌所顧問、歌人	享和元年(1801)	明治13年(1880)	和歌		元長州藩士、国学者

(計66名、68作品)

まれています。その作者一覧が【表】で、付属の芳名帳などを参考に作成しました。【表】をみると、冒頭の有栖川宮熾仁親王から末尾の近藤芳樹にいたるまで、さまざまな人物が書画帖に参加していることがわ

かります。先述の柴田をはじめ、明治時代に活躍した画家や書家たちが大半を占めていますが、有栖川宮熾仁親王や山田空斎(顕義)などの陸軍関係者、その他明治新政府の要職に就いていた人物も多くみられ

ます。出身は元長州藩士が目立ち、先程の山田や近藤、鳥尾得庵(小弥太)など六名が名を連ねますが、一方で勝海舟や山岡鉄舟、大鳥圭介など元幕臣の名もあります。さらに先程の有栖川宮や千家、渡辺華山の

作成者と作成目的の謎

この書画帖には序文や跋文がなく、作成者や作成目的がわかっていません。ただし情報に皆無というわけではなく、作品中にわずかながら手掛かりを見いだすことができます。

元福岡藩士の画家、姫島竹外(ひめじま たけぐわい)の作品(8)は、水墨画と漢詩の画賛からなりませんが、画賛の末尾に「井上長兄」と記されています。「囁」は「頼む」という意味がありますので、「井上長兄」という人物が姫島に作品を依頼した、という解釈が可能です。また、元長州藩士の岡雨香(おかうこう)の作品(57)にも「井上兄」の文字がみえます。実にわずかな手掛かりですが、ここから、この書画帖は、姫島や岡から「兄」と慕われる「井上」という人物が作成した、もしくは「井上」のために作成された可能性があると

も考えられます。この「井上」がどのような人物か、書画帖に名を連ねる人物たちを鑑みるとさまざまな可能性が思い浮かびますが、今回は、この「井上」が書画帖成立に関わっていたのではないかと指摘するまでにとどめておきます。

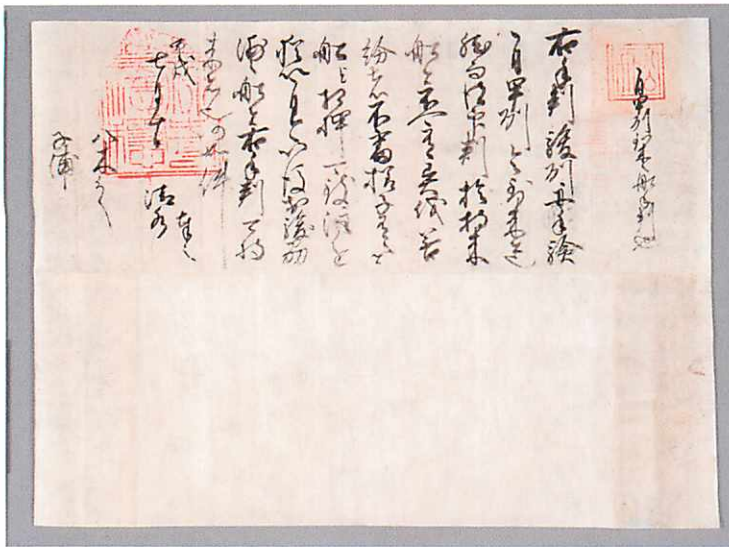
おわりに

以上のように、本資料には多くの謎が残っています。今後、作品の内容や作者同士の関係を検討し、成立年代や作成者、作成の目的に迫っていければと考えています。(小林紀子)

ほうじょうけ しゅいんじょう 北条家朱印状

平成一九年度（二〇〇八）、横浜市歴史博物館では「北条家朱印状」を購入しました。

この資料は、戦国時代の天正二年（一五七四）七月十日の日付をもつもので、「北条家船手判朱印状」とも呼んでいます。縦三・四センチ×横四二・二センチ、紙を半分に折って使う「折紙」形式で、袖部分（紙の右側）に朱印を押した別紙を添付して、そこに「甲州より到来の船手判なり」との墨書があるのが特徴です（写真）。



内容は、まず①添付の手判（朱印）が駿州（駿河国、現在の静岡県東部）の船人の持つものであり、それは甲州（甲斐国、現在の山梨県）よりもたらされたこと、よって②この手判を持って来た船は問題なく通すこと。③もし乗組員に不審な様子があったら、船を抑留して知らせて来るように。④今後は駿州浦の船は、この手判を持って来航することになる、というものです。

文書の差出は「清水 之れを奉ず」と、小田原北条氏の家臣で伊豆国の一部を支配した清水氏であり、宛所は「八木殿 子浦」と、清水氏の下に組織された小領主・八木氏と、その領地である子浦（現南伊豆町子浦）の領民、すなわち漁師たちになります。伊豆半島は、半島の東側を相模湾、西側を駿河湾と接しており、半島の先端に近い子浦は、船が駿河湾側から半島を回って小田原へ向かう際の重要な中継地の一つとして、駿河湾からの船がひんばんに出入りしていたと考えられます。しかしそれら船に乗る人たちが、どうして甲斐国よりもたらされた船手判を携行することになったのでしょうか。

小田原北条氏は、初代・伊勢宗瑞（北条早雲）が相模国に侵入し、二代・氏綱が小田原城を本城と定めて後より関東一帯を支配して、越後国の上杉氏、甲斐国武田氏と拮抗して三つどもえの勢力争いを展開していきました。元亀二年（一五七二）十月に三代・氏康が死去すると、四代・氏政はそれまで越後国の上杉輝虎と結んでいた同盟（越相同盟）を破棄し、武田氏と再び同盟を結びます（甲相同盟）。北条氏と武田

氏は互いの領国の領有を認め、駿河国では狩野川・黄瀬川を境に西側を武田領、東側を北条領と定める「国分け」を行いました。この国境は現在の静岡県沼津市・清水町一帯に引かれていたようです。



「北条家朱印状」の宛所 子浦と江梨の位置

この駿河国と伊豆国での国分けの後、今回紹介する船手判が必要となったと考えられます。すなわちそれまで武田氏と敵対していた北条氏は、伊豆領国沿岸への駿河湾側からの入船を制限していたはずであり、それを今後は通行できるようにするため、沿岸の領民たちに具体的な方法を明示する必要があったのです。おそらく甲斐国側より提示された船の手判は、駿河湾で甲斐国からの荷を積んだ船の船頭たちに与えられ、小田原や関東を目指しました。そしてそれをチェックする海の関所の一つが、伊豆国子浦に存在したのでしょう。さらに言えばこのような命令を小領主・八木氏のみではなく、子浦の漁師たちにも伝えていたことは、もともと沿岸住民全体で入港する船を常に監視して警戒に当たる、在地の自己防衛の制度を北条氏側が取り込んでいたからに他なりません。同様の資料には、例えば同年同日付で鈴木丹後守およびその領地の江梨（沼津市西浦江梨）に宛てたものがあり、この資料は、神奈川県立歴史博物館に所蔵されています。このほかにも伊豆半島沿岸の多くの地域に同じ文書が発給されていたと考えられます。

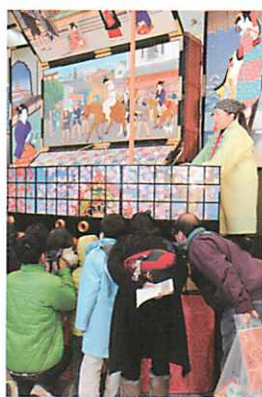
（阿諏訪青美）

のぞきからくり「八百屋お七」展示報告

平成五年（二〇三）一月、新潟市指定文化財であるのぞきからくり「八百屋お七」（新潟市巻郷土資料館所蔵）が博物館に展示され、四日ほど実演を行いました。

のぞきからくりは、覗き穴を通して「中ネタ」という布の押し絵で作られた絵を見ながら口上を聞いて楽しむ芸能です。覗き穴に取り付けられている凸レンズを通して押し絵を見ると、まるで3Dのように浮き出て見えることから「のぞきからくり」と呼ばれています。

国内には現存する実演可能なのぞきからくりは、平成三年（二〇〇）夏の「大紙芝居展」で展示した新潟市巻郷土資料館所蔵の「幽霊の継子いじめ」だけでした。巻郷土資料館ではこのほか約二〇〇年前に作られた「八百屋お七」の中ネタを所蔵しています。



したが、平成四年（二〇二）三月にのぞきからくりの屋台を新たに造り、実演ができるようになりました。二年前の縁から、今回新春特別公演として「八百屋お七」が横浜にやってきました。

実演の観覧者の中には、七〇年くらい前に横浜市南区宮元町の祭礼で実際に「のぞきからくり」を見たという方や、「八百屋お七」の口上を宴会で歌った経験のある方などがあり、「のぞきからくり」にまつわるエピソードをうかがうことが出来ました。

今回の公演を実現していただいた口上師であり巻郷土資料館館長でもある土田年代氏、また組立や解体にあたられた新潟市巻文化会館の篠沢純作氏、花岡幸弘氏にこの場を借りてお礼申し上げます。

「武家の古都・鎌倉」の世界遺産登録にむけた活動

横浜市では、「武家の古都・鎌倉」の世界遺産登録を目指して、神奈川県、鎌倉市、逗子市と共同して「世界遺産登録推進委員会」を結成し、その活動を進めています。平成二十四年一月には国から推薦書がユネスコ世界遺産センターに提出され、平成二十四年九月にはユネスコの諮問機関である国際記念物遺跡会議（イコモス）の現地調査が行われました。平成二十五年の六月には「世界遺産委員会」において、登録の可否が決定する予定となっています。「武家の古都・鎌倉」は、鶴岡八幡宮をはじめ二に及ぶ構成資産から成り立っています。この中には、横浜地域に所在する、

国指定史跡の「称名寺」と「朝夷奈切通」の二か所が含まれています。

横浜市歴史博物館・横浜開港資料館・埋蔵文化財センターなどを管理運営する「公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団」は、横浜の歴史と文化財の普及啓発活動に関する重要な役割を担う団体として、横浜市と連携しながら、「武家の古都・鎌倉」の世界遺産登録に向けた活動を行ないました。

埋蔵文化財センターでは、平成二十四年八月に栄区民文化センターにおいて、称名寺・朝夷奈切通をはじめ、上行寺東やぐら群、鼻欠け地蔵などの文化財や瀬戸神社の発掘調査風景などのパネル

とみられ、子の顕時、孫の貞顕の三代にわたり、伽藍や苑池・浄土庭園が造営されました。元亨三年（一三三三）に七堂伽藍が完成し、その時に作成されたとみられる「称名寺絵図並結界記」（以下、絵図）により、当時の伽藍の状況を知ることができます。

苑池部分は、史跡公園として保存整備するため、昭和五三年（一九七八）から発掘調査が行われ、絵図に描かれた両橋の橋脚などが検出されました。平成二二年度（二〇〇〇）と翌一三年度（二〇〇一）には、絵図に描かれている、講堂・方丈・兩界堂・称名寺（阿弥陀堂・三重塔などの多くの建物の有無、それらの規模・位置を確認する調査が、埋蔵文化財センターにより行われました。この調査で貞顕による苑池造成以前に境内全域の整備が行われたことが判明し、講堂の基壇や兩界堂の礎石も検出されました。

展示では、埋蔵文化財センターによる発掘調査の結果を紹介しました。出土した輸入陶磁器である青磁香炉・碗・壺片、かわらけ、鎌倉の永福寺との関係を示す「永福寺」銘の瓦、北条氏とのつながりを示唆する三鱗文をもつ瓦などの遺物と発掘状況の写真パネルを紹介しました。同時に、エントランスホールにおいて「世界遺産登録推進委員会」が作成した、登録への取り組み状況や構成資産に関するパネルを、展示室前の廊下では埋蔵文化財センターが製作したパネルを展示しました。

こうした展示を通して、市民の方々に「武家の古都・鎌倉」の世界遺産登録の意義と登録へ向けての活動を理解していただけたのではないかと思います。

（平野卓治）

展示室の様子



エントランスホールでのパネル展示の状況

横浜市歴史博物館では平成二十四年二月八日から平成二十五年一月四日まで、「称名寺を掘る」展を開催しました。

ちよいと

ミュージアムショップたいむ Museum Shop Time

「レックル」と「踊るはにわ」のコラボ新登場！

当博物館のオリジナルキャラクター、オナガドリの「レックル」と当館受付スタッフデザインの「踊るはにわ」がコラボしたボールペンとクリアファイルのセットが感謝デー（1月26・27日）より新発売。既に昨年春からデビューしていた「レックル3色ボールペン（赤・青・黒）」はクリップのカラーがピンク、オレンジ、

クリップ部分にはレックルと「横浜市歴史博物館」の文字が印刷されています



セット価格500円(税込)
ボールペン単品各色1本500円(税込)
クリアファイル単品150円(税込)

黄緑、水色、グレーの5種類から選べます。【踊るはにわ】がキュートなクリアファイルは本体が透明、ブルーの印刷色がとてもシンプルで使いやすく仕上がっています。それぞれ単品で購入もできますが、セットで購入するとよりお得！博物館・当館記念にいかがでしょうか？お子様から大人まで使う人を選ばないシンプルさが受けています。ぜひお気軽に手に取ってみてくださいね！

??????? 知ってますか ????????

横浜歴史博もりあげ隊

横浜市歴史博物館は、開館18年目、人間であればもうすぐ成人という時期をむかえました。

この18年の間の様々な博物館事業に参加をしたOBが作った4団体が基礎となり、2011年10月、利用者サイドからのメッセージを博物館に伝えるべく、「横浜歴史博もりあげ隊」※という市民グループが誕生しました！

その活動内容は以下に記しますが、自発的に企画されたものばかりです。また、1月の感謝デーでは、クイズラリーで子ども達を大いにひきつけてくれるなど、活躍の場を広げています。

今後も、博物館サイドの視点だけが一人歩きしないよう、もりあげ隊というチェック機能を存分に生かして頂きたいと思っています。

★当館と定期的な意見・情報交換

★まねき猫の提案箱を設置し、意見をまとめて博物館へ提出

★アンケートによる市民の意識調査、結果を博物館へ提出

★博物館を市民にアピール（講演会『博物館における市民協働』・講座『横浜市歴史博物館を知ろう！』）

★市民と一緒に学ぶ連続講座『出雲風土記にみる日本の古代社会』

※その前身は「横浜市歴史博物館関連団体連絡会」（2008年3月設立）です。



博物館感謝デーにて(2013年1月)

これからの催しもの

◎特別展「N.G. マンローと日本考古学—横浜を掘った英国人学者」
4月6日(土)～5月26日(日)

◎収蔵資料展「博物館所蔵 近世絵巻物の世界」(仮称)
6月8日(土)～7月7日(日)

◎企画展「古代の水信仰—水場と井戸のまつり—」(仮称)
7月27日(土)～9月23日(月・祝)

表紙写真は

中世展示室の中央にある「六浦地形復元模型」は、現在の横浜市金沢区内、京浜急行金沢文庫駅から金沢八景駅の間に広がっていた入り海の地形を、1600分の1で再現したものです。深い入江は天然の良港となるだけでなく、日本各地や外国からの船も着岸して、都市鎌倉に多くの物資を供給しました。写真は鎌倉から瀬戸橋、上行寺門前を経て朝比奈切り通し、さらに鎌倉へ続く「大道」と呼ばれる中世の幹線道路をとらえています。

横浜市歴史博物館 日誌

二〇一二年一月一日～二〇一三年三月三十一日

- 10月3日 体験学習室ミニ展示「武士の時代」(11月29日まで)
- 10月6・7日 体験学習「縄文時代の土偶」
- 10月13日 特別展「畠山重忠—横浜・二俣川に散った武蔵武士—」開催(11月25日まで)
- 10月21日 特別展関連研究講座「畠山重忠とその時代」
特別展関連フロアレクチャー
- 10月24日 ふるさと横浜探検「世界遺産登録候補 朝夷奈切通と武家の古都鎌倉を歩く」
- 10月27日 特別展関連フロアレクチャー
ラストサタデープログラム「学芸員による常設展示室の解説【原始I】」
体験学習「縄文時代の土偶」野焼き
- 10月28日 都筑・遺跡公園・民家園 アート月間(11月23日まで)
- 11月4日 特別展関連講演会「源平内乱と畠山重忠」
- 11月7日 特別展関連バスツアー「畠山重忠の故地を訪ねて」
- 11月11日 特別展関連研究講座「平安時代末～鎌倉時代の大鎧」
特別展関連フロアレクチャー
- 11月14日 特別展関連・ふるさと横浜探検「畠山重忠の遺跡を訪ねて」
- 11月18日 特別展関連研究講座「秩父平氏の展開 川越氏と畠山氏」
特別展関連フロアレクチャー
- 11月23日 特別展関連講演会「鎌倉幕府の成立と畠山重忠」
- 11月24日 ラストサタデープログラム「学芸員による常設展示室の解説【原始II】」
- 11月24・25日 体験学習「ぞうり編み」
- 11月25日 特別展関連フロアレクチャー
- 11月30日 体験学習室ミニ展示「ちょっと昔を探してみよう」(4月4日まで)
- 12月8日 企画展「武家の古都・鎌倉」世界遺産登録推進事業関連
称名寺を掘る・横浜の遺跡展—縄文時代中期の横浜—」開催(1月14日まで)
- 12月15日 企画展関連フロアレクチャー
- 12月15・16日 体験学習「和風」
- 12月16日 第23回エントランスホールコンサート「ひとあし早いクリスマスコンサート
リズムとハーモニ—のステキな贈り物」
- 12月22日 ラストサタデープログラム「学芸員による常設展示室の解説【古代】」
- 1月5・6日 のぞきからくり「八百屋お七」
- 1月12日 企画展関連講演会「縄文時代中期の横浜」
収蔵資料ミニ展示「幕末・明治の書と画」(1月20日まで)
- 1月13・14日 のぞきからくり「八百屋お七」
- 1月14日 企画展関連フロアレクチャー
- 1月16日 「近世史講座」(2月13日まで全5回)
「古代史講座」(2月13日まで全5回)
- 1月19日 ラストサタデープログラム「学芸員による常設展示室の解説【中世】」
- 1月20日 収蔵資料ミニ展示解説
- 1月26日 企画展「仕事がかどるギザギザ農具 千歯こき—こうして横浜へやってきた—」
開催(3月24日まで)
- 1月26・27日 開館18周年記念博物館感謝デー
- 1月27日 企画展関連フロアレクチャー
- 2月2日 開館18周年記念特別講演会「千恵の生涯—生麦村「関口日記」から—」
企画展関連フロアレクチャー
- 2月3日 「土器づくり教室」(3月16日まで全4回)
- 2月9日 収蔵資料ミニ展示「鶴岡八幡宮関係文書と横浜」(2月17日まで)
- 2月9・10日 体験学習「紙すき」
- 2月11日 企画展関連フロアレクチャー
- 2月16日 体験学習「横浜の土偶」
- 2月17日 収蔵資料ミニ展示解説
- 2月22日 体験学習「あじろ編みでバックをつくろう」
- 2月23日 ラストサタデープログラム「学芸員による常設展示室の解説【近世】」
- 3月9日 企画展関連フロアレクチャー
収蔵資料ミニ展示「鍛冶ヶ谷村名主・二代小岩井六郎兵衛とその周辺」(3月17日まで)
- 3月13日 ふるさと横浜探検「三浦半島の城址を訪ねて」
- 3月16日 「土器づくり教室」野焼き
- 3月17日 収蔵資料ミニ展示解説
「センター北まつり」出展
- 3月24日 企画展関連フロアレクチャー
- 3月30日 ラストサタデープログラム「学芸員による常設展示室の解説【近現代】」

編集後記

特別講演会当日、「御殿伯母」のくだりで頭をかすめた祖母が、他界した。明治生まれのモリで、一家を陰ながらつちり統率する求心力を持ち続けた人。まさに「女性の力に支えられた」我が家…。ジェンダー云々はさておき、新年度の博物館も個々の力でもりあげて行きたいと思えます！(f)

横浜市歴史博物館および大塚・歳勝土遺跡公園の利用案内

●開館時間

午前9時から午後5時まで(ただし、入館は午後4時30分まで)
大塚遺跡を除く公園部分は24時間オープン

●休館日

歴史博物館・大塚遺跡
月曜日(祝日の場合は翌日)、年末年始
そのほか展示替えなどのため、臨時に休館することがあります。

●常設展観覧料

区 分	個 人	団 体 (20人以上1人につき)
一 般	400円	320円
高校生・大学生	200円	160円
小学生・中学生	100円	80円

◆特別展・企画展の観覧料は、別に定めます。

◆毎週土曜日は、小・中・高校生は無料です。

◆「濱ともカード」「敬老特別乗車証」「愛の手帳(療育手帳)」「身体障害者手帳」「障害者手帳」をお持ちの方は無料です。

●交通案内図 横浜市営地下鉄「センター北駅」下車徒歩5分

(「センター北駅」へは横浜駅から23分 新横浜駅から12分)



駐車場あり(1時間200円)

●インターネットホームページ <http://www.rekihaku.city.yokohama.jp/>

●@yokorekihaku

